

俳句

大津俳句会

冬の蝶思はず高く舞ふ日和

井芹眞一郎

八方の風受けて立つ枯木立

秋山 恵子

喪心の余韻を胸に年惜しむ

市原 初女

屋根を越へ大手を広げ枯木立

大塚喜久子

一碗の香りに偲ぶ零余子飯

坂本 セキ

古き良きミュージカル見て年暮るる

佐賀 久子

火山灰混じる雨となりたる大枯野

松尾 昭雅

時雨音首まで沈む湯舟かな

渡邊佳代子

枯菊の香りと共に焚かれけり

岡崎 浩子

銀杏黄葉青空さらに濃くしたる

森山美穂子

俳句

つのはな句会

街路樹はだかに演歌聴きながら

星永 文夫

死が巣食う街に置かれたポインセチア

中山 宙虫

挑発するな寺領の赤椿

栄田しのぶ

戸惑いの増えて師走の倦怠感

志賀 孝子

おしくらまんじゅう押されて銀河はみ出して

田上 公代

来し方を賽の目に切り年惜しむ

木庭 杏子

ホットケーキ迷いの数ほど焼いてみる

上杉 波

ジャケットの衿立て弱気の虫かくす

矢嶋 道子

団欒の湯豆腐の湯気に母が居た

水野 春子

めぐり来て今咲かんとす寒椿

梅木トキエ

冬怒涛アフガンの星今いざこ

塚本 洋子

短歌

大津短歌会

朝光^{あさかけ}を浴びつつ歩く畔道の

草葉に結ぶ露の煌めく

豊岡ミツル

十月十月らしき登さがり

やつと半袖麻物終う

渡邊佐代子

夜半過ぎ夢枕に立つ老いし母

いのち燃え尽く前触れなりき

鞍 岳志

孫の手に頼りて独り頬笑みし

来し方夫の温もり募る

管野 静

年古れば無欲となりて

すがすがし星降る里の丘に来て立つ

吉永 恵子

夕陽受け煌く銀杏見上げれば

幹の太さに古思わむ^{いにしへ}

小平 善行